

(6) 若松児童ホーム関係者のオーラルヒストリー (二)

語り手：佐々木偉昇（元・若松児童ホーム保育士）

1936年2月13日生

佐々木和代（元・若松児童ホーム保育士）

1942年1月23日生

聞き手：田上繁、若宮幸一

聞き取り日：2012年8月10日

場 所：ホテルルートイン・ロビー（若松区本町）

児童ホームの来歴

佐々木： わたしは、先日どれぐらいになるかな、1カ月ぐらい前に、NHKのディレクターさんがね、ぜひ話を聞かしてくれと、その方自宅までお出でたんです。自宅まで来ていただいたんです。そのときに若干のその資料をですね、「もうこういう話は滅多になかろうから」ちゅうんで少しお渡ししたんです。夕べちょっと探したんですけどね、やっぱり急だから（笑う）。あっちゃこっちゃいろいろと。だけど、またあればですね、と思ひまして。

田 上： はい。それで先生が勤められたのが、お電話でうかがいましたように。

佐々木： ええ。私は36年ですね。

田 上： 36年に就任された？

佐々木： はい。だから、その当時が篠原先生で、小学校を退職された校長先生上がりの方が施設長でしたね。理事長さんが牧野ひでおさん、でしたかね。

田 上： そうですか。先生何年までですか。

佐々木： わたくしは、平成ちょっと9年、11年までですね。

田 上： 11年までですか。昨日、わたくしお電話で申し述べましたように、わたしが小学校5年のときに。古前小学校だったもの

ですから。松崎さん、松崎君ていうんでしょうか。そのあと1回も会ったことはないのですけれども。

佐々木： 松崎。ああ、おりましたね。いやその名前は分かります。

田 上： 松崎さんという方がですね、「うちの方に遊びに来ないか？」と、滅多に口をきく人じゃなかったんですが。私の方もそういうなにか感じ合うところがありまして。それで、行った先が船の方で、おらぶんですね。あの「ハルヨシやーい」ちいって。おそらく「春吉丸」という名前だったと思うんです。で、お父さんが迎えに来られて、そして、それに乗してもらって半日遊ばしてもらったという、そういう体験がございまして。それと、私の兄の連れ合いがやはり児童ホームでお世話になって。中元と、旧姓中元。

佐々木： 中元というのは、わたし聞いたことあるんですけどね。お名前だけはうかがっていますけどね。

田 上： 弟が2人いてですね。姉と弟が2人で、下の方の弟がわたしとおなじでした。そんな関係でですね、船上で生活される方の歴史をきちっとどこかで留めておきたいんだと。

佐々木： はい。児童ホームが昭和4年ていうのは、すでにご存じですね。

田 上： はい。昭和4年にいろいろな寄付金を受けて。

佐々木： そうですね。わたしが入った当時、だから児童ホームと、それからもう1つ厚生寮（若松船員厚生寮。浜4番町）ていう、若松のなんですか、向こうの北の方に、厚生寮。児童ホームに入り切れないで、そちらの方にも子供さんたちが入っていましたね。

田 上： そうですか。厚生年金のコウセイですか。

佐々木： そうです。

田 上： あの船上の方が？

佐々木： ええ、そうです。養護は子供さんが来てですね。そして、その後ですぐ、昭和何年ですか、37年ぐらいですか、八幡の児童ホームていうのができてね。そこは30名の定員でしたけど。そちらにも、だから船の関係の子供さんが。門司ヶ関はもうご存じだと思いますけど、門司港に、あそこが70名の定員で。

田 上： 門司にもあったんですか。

佐々木： ええ。門司とだから八幡と若松。若松が一番なんていっても大きな。

田 上： 門司はなんというあれですか。

佐々木： 門司ヶ関学園。今はですね、裏門司の、田の浦の方にもう建物は変わっていますがね。もう、あれが10年ぐらいなりましようかね。

田 上： 八幡は、やはり八幡児童ホーム。

佐々木： 八幡児童ホーム。これも、北九州市で市が建てましてね。その後40年以降、子供が上りましたから。それでも潰したんですね。それまでは、だから、でっかかったですよ。だから、われわれ交流は船の関係と、それから北九州の養護施設の中の1

つですから、大変な交流をやってましたから、活発に。だから、卓球があったり、野球やったり、芸能祭というのは、今でもまだ続いていますけれどね。若松市民の今年もやっていますよ。

田 上： 左様ですか。例えば、暁学園とか、この前もいろんな方から聞いたんですけど、その人たちとの。

佐々木： はい。暁の鐘が、いま高塔山の方から若松のあっち、どうなりますかね。

若 宮： ちょい先ですね。

佐々木： 移りましてね。あの畑（地名）でなくて。ちよさき。

若 宮： おだけですね。うちおだけというところですね。

佐々木： 定員は今40名ぐらいですけど、暁の鐘ももうそりゃ今新しい方でやられています。あそこのお父さんのお父さんが、秋田千代太郎さんでしたかね。あの児童ホームの一番始めの理事長さんですね。秋田きよたろうさんでしたか。

田 上： （佐々木先生の）ご出身は若松ですか。

佐々木： 門司です。

児童ホームでの生活と教育方針

田 上： 今の児童ホームは、海上生活者の方が昭和40年代でほぼ終わって。

佐々木： 昭和40年のときに港湾労働法が制定されて、半分以上上りましたけど。それから10年くらい、昭和40年から50年近くまでは、そうですね、14、5人はおりましたね。

田 上： 14、5名おりましたか。今はほかの方がいろいろな。

佐々木： はい。今は一般養護の方ですね。だから、40年ぐらいから一般養護の方が入れられるようになりましたね。

田 上： 中井先生は、もう46年か47年に就任

されたといわれて。

佐々木： あの先生はわたしより年が上なんですけど、あの先生がそうですね、入られたときは、もうハシケの関係はどうだったでしょうかね。何人かはもちろんおりましたけど。

田 上： 数名の方ですか。で、先生におうかがいするのが一番もう、泊まられて生徒さんの面倒をみられたと。

佐々木： ええ。私は3年間、あそこの中に小さい離れがございましてね。そこに畳のベッドがありましてですね。そこを1部屋お借りして3年間過ごしました。

田 上： そうですか。それじゃ、やはり昭和30年代ですか。

佐々木： 昭和36年、7年、8年。

田 上： 36、もう就任されてからずーっと？

佐々木： はい。そうですね。

田 上： そのときは、もちろん船員の方？

佐々木： ええ。船の関係の方ばかりでしたね。

田 上： そのときは100名ぐらい？

佐々木： ええ。102名おりました。

田 上： 102名ですか。

佐々木： 定員が102だったんですよ。

和 代： 108人ぐらいいた。

田 上： 108人ぐらい。定員が102で。

佐々木： はい。定員が102。

田 上： 2というのは、随分半端な。

佐々木： ええ。102、そうでしたね。

田 上： ほぼ満員ていうか。

佐々木： だから、定員オーバーしても、結局はその外（がい）で置かなければ、そこに行けなかったからですね。

田 上： えっ、外（がい）でいいですよ。

佐々木： はい。定員外ですね。

和 代： わたしが働いていたころは多かったですね。108人とか、110人。

田 上： 奥様も昭和36年から。

和 代： いえ、いえ。その後ですけど。ちょうど

ハシケの最後の年、2年ぐらい。

田 上： 昭和40年、40年代ですか。

和 代： はい、はい。8、9あたりはちょっと経験はしました。

田 上： 38、39、そうですか。

佐々木： やっぱり今は子供に北九州市は特に5対1の割合なんですね。子供5人に対する職員が1人ですよ。で、当時は10対1でしたからね。非常に福祉が十分でなかった。だから、10対1でそれをみるとなると、結局、皆さんそこにいなければ、職員がだれもいなくなってですね。8時間勤務ではね、いきませんから。だから、そこにおって毎日みる。

田 上： いろいろな苦勞もあった。

佐々木： それは、われわれ当時は当たり前と思っていましたよね。僕は自分が住み込みていうか、一緒に生活してみて、今子供たちの状況でなあ、本当によく分かりましたけどね。誰にも負けませんよ、だから。今、あれはハシケじゃないけれども、一般養護の方も入っています、ね。[] しますけど。子供たちの気持ちというのは、その中に長くおれば、ストレスがたまりますね、フラストレーションが。これで無茶をしたりするのがおるんですよ。そこをやっぱりどう押さえていくのか、いずれも問題じゃないでしょうかね。だから、施設が僕はすべていいとは思いませんけどね。

田 上： 子供の教育にとってですか。

佐々木： ええ。よっぽど職員がやっぱり。だから職員が北九州市は5対1でやりますけど。今現実には国は6対1ですからね。本当はまだ2対1ぐらいは欲しいですね、特に幼児はね。

田 上： 2対1でね。すると、彼らが、わたしも小学校にずーっと隣にいて。で、生活形態は土曜日の午後に、当時半ドンてありまし

たよね。それが終わって船に帰るていう。

佐々木： それが帰れる人と帰れない人てのがありましたからね。だから、迎えに来てくれるお母さん、お父さんがいる、そのときはいいんですよ。帰れない子供は、やっぱりとても悲しみますからね。それをどう職員がいくか、そういう問題はありましたね。100人おるから100人全部帰るて訳にはいきませんね。

田 上： 大体何割かは、どうしても。

佐々木： ええ、そうですね。

田 上： 1、2割ぐらいは帰れない。

佐々木： もう必ず残ります。

田 上： 残りますか。そうすると、児童ホームでは食事とかもそこでまた用意してあげる。

佐々木： ええ、職員もおりますからね。

田 上： うちの義理の姉なんかは1度帰ったけども、声を大きく張り上げるのが恥ずかしくって、届かないらしいんですね、向こうでこう作業をしてるもんですから。岸壁から呼んでも。それで仕方なしに、また児童ホームの方へ戻って、そしたら、「ご飯も用意してくれた」ちて語って感謝してましたけどね。

佐々木： ええ。船の中で、船のご父兄の中でPTAができてね。会長さん、それから副会長さん、それぞれこう役割を持たれて。だから、1カ月か、2カ月に1回必ずお出でてましたよ。それとか、わたしまだ若かったから、やっぱり叱っていましたからね。で、叱ると、「叱り過ぎじゃないか」ちゅうて、呼ばれましてね、先方から怒られました。

田 上： PTAの方から？

佐々木： PTAの方から。だけど、現実には年齢的にちょうどそういう年代に入っていきますからね。小学校の高学年から中学校に入っていく。反抗的になります。これも自然で

すけれどね。それをどう分からしていくかていうのが、それが非常にむずかしい問題でしたね。それを、だけど、頭から押さえ込むと、「あの先生はもう押さえた」と。ていうと、こんだ、父兄の方にそれをいう。子供はいいことをいいますからね。もうそりゃ剣幕は凄かったですよ、うん。「お前どうして、俺んとこの」ってね。若松弁ちゅうのは特に厳しいですからね。

田 上： うん、うん。中井先生もいってましたですけれどね。もう今の方がむずかしいとかいってましたね。ちゃんと説明して手を出しちゃあいけないとか。もとは頭から「なにしょんね」ちゅうて、それでもう解決ができることが、今は。

佐々木： 今は、そうですね。手を出すてのは一番最低ですけどね。われわれは自分がいって、結局、これは、やっぱり経験によって自分ていうものがこう創りあげられていくから。若いのによると、すぐ呼んで、手を出そうとする。だから、自分、言葉でいって、子供が「はい」て、こういえるようになるにはどうするのか、そこが問題ですね。

田 上： 一番いい方法には、どういうものがありますかね。

佐々木： 子供とのコミュニケーションですから、「説得の基本はなんですかー」ちいったら、やっぱり思いやりと心の温かさ。そして、それがやっぱり心にあるプラスをこう形にして子供たちに伝えてあげないと、分かりませんね。自分が「こう思ってるんだ」ちいっても。子供に伝えてやらんと子供は分かりませんから。その姿勢で先生を信用して、そこに信頼関係がなかったら、どんなになにか悪いことして、先生来ました、「なんでお前するか」ちゅうて叱る。それで、感情は自分はこうこう思った人は感情がすっきりするでしょうが、叱られた

方はね、「なんであの先生からあんなこと
いわれるんや」と。だから、担当する職員
がもっといい意味のコミュニケーションを
するにはどうしたらいいのか、絶対分かり
ませんよ、今の人たちは。勉強が足りませ
んよ。

田 上： 当然、それぐらいは分かっているだろう
と思っているんだけど、子供さんの方に
しては必ずしも分かっているから、きち
んと説明を。

佐々木： それも子供もAからZまでおりますか
ら。全部取り方が違いますから。おなじこ
とでいって子供が分かる訳ないんですか
ら。やっぱり、そのケースバイケースで話
してあげないと。そこが一番むずかしいで
すから、特に、船の関係ではご父兄がおら
れますからね。やっぱり三位一体、わた
しゃあよく三位一体というですけど。「子
供とそれからご父兄の方と職員との連携が
やっぱりうまくいってないと、三位一体は
崩れるよ」と、職員によくいってましたけ
どね。

田 上： その親御さんですよ。

佐々木： はい。

田 上： 会合は何回か決まって持ってたんです
か、PTAと。

佐々木： ええ、ありますね。月1回必ず。そし
て、あると職員の方に対する要望が非常
に多かったですね。「ああして欲しい、こ
うして欲しい」。で、船の方ちゅうのは、
1週間に1回来て、それで帰りますね。
で、わたしよく様子が分からんから、1
度、山本さんておられましてね、お父さん
が「1回うちに来てみませんか」と。それ
で細い橋を渡って、あの船から船へやっ
と船底に降りて、そこが部屋になってま
してね。そこで食事を一緒にさせていただ
いて。で、そこで一緒に寝起きやるんです

ね。だから、子供にとって、やはり果たし
て環境的にはどうなのかというのはよく分
かりません。

それから、お母さんやお父さんを見てい
ると、着飾るというよりも、食べ物にもの
凄くお金をかけますね。だから、食べるも
んは、そりゃ凄かったですよ。特に、船に
子供が帰ったときの食べ物ていうのはです
ね、もう本当にご馳走ですね。で、わたし
も呼ばれたけど、これじゃあ日本は負ける
なと（笑う）。こんだけ数でも予算の関係
がありますからね。だから、子供はどうか
したら、「こんなもん食えるか」ちゅうの
もおりますからね。だから、やっぱり親の
PTAの話し合いの中で、そういうことも
話をさしていただいたんですけどね。そ
りゃ、むずかしいですね。

田 上： そうやって、先生は船まで行かれて、そ
こまでちゅう先生方はなかなか、佐々木先
生以外にいらっしゃらなかったのですか。

和 代： わたしも行きましたよ。[]。

田 上： そうですか。そういう先生方がいら
しゃってねえ。今3名の方からいろい
ろ、なんていうんですかね、今研究の世界
にオーラルヒストリーという1つの手法
がありましてね。文献で研究、わたしなん
かは江戸時代の近世文書で研究はするんで
すけど、近代以降の研究の1つの方法と
してオーラルという、先生が指導の方に当
たられたご経験を語っていただいて、そこ
から新しいなにかを展開しようというよう
な研究があるんです。で、お三方からこう
聞きまして、非常にわたくしどもも教えら
れることが多かったんですけど。みなさ
ん、弟さんか妹さんかを亡くされているん
ですね。やはり落っこちて、学童に上がる
前に。だから、わたしは児童ホームの制度
とかていうのが凄く、当時のあれでは先進

的で斬新で、おそらくそれがなかったら、まだそういう事故があったと思うんですね。

和代： そうですね。

田上： それで、小学校になれば、そこに寄宿生活ということで、確かに親と離れてというのは大変でしょうけど、船上での作業をやっているときに、親御さんの目が届かないから、ちょうど学校に上がる前に、次の船から次の船へ行くときにずるっと滑って、海に落ちて、3人が3人ともがですね、そんな経験があって非常に辛い思いをされたんです。「今だと語られるんですけど」という話なんです。

佐々木： わたしのときも、そういうことがございましたね。だから、子供って、今船に限らず、子供たちってもの凄く可愛いんですよ。もう一言でいうと。それで純粋ですよ。むしろ、「親がいることによって、彼らはまだいいな」と。ていうのは、あとからうちも一般養護が入って来たときに、それをつくづく感じましたね。

田上： 1週間こう離れているけれども。

佐々木： 必ず帰れますからね。

田上： 帰る場所があるということですね。

佐々木： そういうことです。わたしはあの施設にいて、たまに門司まで帰るとき、門を出たときに、もう本当にほっとしてうれしいという気持ちになるんですね。そのときに、「はあー、子供たちと一緒にやな」と思って。

田上： それで、必ず親が日曜日の夕方には。

佐々木： そうです。

田上： 親御さんが連れて来るちゅうのは、中学3年とかなってもやはり親御さんと一緒に来るんですか。

佐々木： いや。中学生3年になると、それぞれ1人で帰って来りましたね。

田上： 小学生ぐらいの段階は。

佐々木： ただし、親が電話を入れてくれました

からね。「今帰したけど、お願いします」と。

田上： なるほど。それでこちらで把握されて、そして、引き受けるていう。

佐々木： はい。

田上： それじゃ、最盛期で100名はもうずーっと。やはり、先ほど先生がおっしゃいましたように入れないと、厚生寮の方へ移動。

佐々木： ええ、入れなかったら。若松地区ですけれどもまだ入れないという子供さんたちは、厚生寮という寮がありましてね。そこに20名ぐらいいたんじゃないでしょうかね。わたしはあんまり行ってないんですけど。3、4度はうかがいましたけど。

田上： 厚生寮の目的は、また別のあれですよ。

佐々木： 厚生寮は、食事をして学校に行かせるということですけども。そうですね、児童ホームとの子供との接触を図ることもたまにありましたけどね。

田上： 厚生寮には、何名ぐらいいたんですか。

佐々木： わたしの知っている範囲の中では、大体20名前後だったと思いますね。建物自体が大きい建物じゃありませんのでね。普通の家を改造して、ていうあれでしたから。多分20名ぐらいいたんでしたね。だから、児童ホームがもう少し規模的に大きければ。ところが、その1部屋に大体、部屋が何畳ありましたか。8畳ぐらい。それでも10人、10人ですよ。本当は、それいけないことやけど。現実にはそうしないと。部屋が男子部屋は5つありましたがね。女子部屋が5つ。もう満タンなんですよ。

田上： それで、上級生と下級生が縦割りで。

佐々木： 縦割りだから、もう1年生から中学生まで一緒に。だから、「兄ちゃんはお兄さんとして、弟たちを見てあげようね」という形をとりましたけど。わたしは、これで

養護士さんがおれば、別の部屋に養護士さんだけをした方がいいと思ったんですけどね。縦割りの兄弟関係も多いからですね。それでいったところ。

田 上： それでも、やっぱりいろいろ日常的な喧嘩とか。

佐々木： あります。あります。ただ、「いじめとか、そういうことだけはやめてくれよ」て。ていうのはですね、わたしは、古前のPTAに役員で入れてもろうたのはなぜかちゅうたら、学校でホームの子だけしか遊んでない、ほかの子は寄らない。それをこう原因を校長さんと話したら、担当にずーっといろいろ聞いてもらって、「ホームの子は汚いとか臭い」とか、そういうことなど1つの子供たちの、あれですね。そういうことが分かったんですよ。「そいじゃいかん」といって、PTAに入らせてもらって、研修会があるんですね。それにわたしお話とかして回って。これ一般養護も後に入ってきますけど。要するに、子供がそういうことをいうんじゃないですよ。親がいうんです、家で。だから、家庭で親がいうのを子供たちが、「ホームの子は汚いよ」とか。だから、それさえなくしていただければ、なんていうことはない。普通に遊べるんですよ。だから、子供たちがいつもホームの子だけで遊んでるんですね。それは、もう僕は非常に嫌だったから。で、原因を突きとめてみると、そういうことだった。だから、学校の方の先生方にもお願いして、そういうことがないように、「これから研修で再々話をさしてくれ」ていうことをお願いしましたけどね。

施設でよくいろんな方が衣類を持って来られてですね、「施設やから、なんも着るもんもみすばらしんだろう」と。で、僕がよく開いてみたら、本当にもうゴミに捨て

るようなものをですね。「こりゃ余りにもひどいね」て、ああ、しましてね。ゴミ捨て場がこうあって、時々わたし見に行くんですよ。近所の人たちが寄って来とるんですよ。「おい、お前、なんか、肉を食べよるやないか」とか。結局、近所の方はね、興味本位でそういうのをいってましたね。だから、「これはいけん、こんだ、近所周辺にもコミュニケーションとらなければ」と。で、近所の町内会に入れていただいて、呑みごとでもなんでも参加してですね、町内会長と仲良しになりまして。やっぱり児童ホームを理解していただくためにね。だから、だんだんそういうことは解けてきましたね。だから、やっぱり施設はいつも閉じ籠もってはいけないんですよ。やっぱり地域にどんどん、どんどん広がっていかないと。それには、自分たちが出ていかないと。それは誰のためでもない、子供のためなんですからね。そういうことでご理解いただけるようになったんですけどね。

だから、ただ単に「船の子を預かっているよ」ていうだけでは駄目なんですよ。古前地区といえば、古前地区を全部知っていないと。だから、お母さんたちも運動会ちゅうともうご馳走こさえて。ところが、もう1つの場所だけしか。だから、みんなが近寄らないですよ。「そこはホームやけ」と。それでは駄目。だから、先生にお願いして、全部区分けをした中にそれぞれ入れていただく。「コミュニケーションがとれないと駄目でしょう」ちゅうて、先生もいろいろおりましたけどね。

田 上： 運動会とか、そういうときには、船を休んで来られるんですか。

佐々木： 親御さんは、いろいろ張り切ってお出でましたね。もう一生懸命。弁当なんかを準備するんだけど、そりゃ、ご馳走され

て。ただ、僕はそのどうこういうんじゃないんですけど、やっぱり人間てなのは見かけ、普通の服装で来て欲しいんですよ、子供たちのために。それがもうなんか、ドテラみたいとか、結局、もうありのままで、船の生活のままで。だから、「あっこはね」ちゅうことになるんですよ。それも後にPTAでよく話したんですけどね。もう1回いただくように。船のですよ。船のPTAの中で、「はあー、そうやな。佐々木のいう通りや」ち。だんだん声が出ましてね。だいぶモダンっていうか、変わってきましたよ。

田 上： 決して高価なものを着る必要はない。

佐々木： ええ、そうなんです。

田 上： 仕事着と、ちょっとこう取り替えて、ハレの日に出てきてもらうとか。そうですか、そういう教育方針っていうか、理念を持たれて当たられてたんですね。

佐々木： クリスマス会とかいうと、もうお母さんたちが。

和 代： 凄かったですよ。

佐々木： 凄かったですよ。そして、子供たちが自分たちで作ったものをお母さんたちの前で舞台作って、食堂で作ってやるんですよ。喜んでいただいてね。だから、それが年末の決まりのようにしてね、やりました。クリスマス会だけ。現実にはみんなのお祝い会ですよ。そんで、お父さんたちも出て歌っていただいたりね。そして、それが終わって、年末で帰れる人は帰るんですよ。

田 上： 誕生日会とかも？

佐々木： 誕生日会、月に1回ですね。

田 上： 月に1回。その月の？

佐々木： はい。その月の生まれた人たちも。1人1人はできませんから、その月の人たちを。大体月の真ん中で。前に座ってもらってですね、調理から赤飯やらを作っていた

だいて。よく、RKBさん、当時ラジオさんであの取材にお出でたこともありましたね。

和 代： [] 映画で []。

佐々木： ああ。吉行和子さんの映画で昔、「お母さん」という映画がありましてね。テレビですよ。30分ものだった。その撮影がうちであったんですよ。船の方が主役で。で、吉行さんはうちの保育士ですね。で、お母さんやなくて、お父さんが、現実になんかということがあってましたからね、海に落ちて亡くなって。で、子供がね、泣きながら海岸を走って行くところなどを撮影に来られた。「これはテレビじゃなくて、現実になんかこういうのがあったんですよ」と。「はい。分かりました」ちね。で、テレビに初めてその児童ホームが映って、その当時のわたしテープを実は持ってるんですけど、どこか奥の方に入れ込んでるんですよ。また、機会があれば。

田 上： そうですか。先生は、今のような教育を九州女子大の方で講義を持たれてやられてるですか。

佐々木： はい。児童福祉事業論てえなあ、まあ児童の福祉は、大体福祉でなく児童相談所がやられていますのでね。「児童相談所が措置して来るんだよ」と。そして、こういう施設が全国に今児童養護施設が700近くありますから。で、今船関係はもちろんありませんけれども。北九州は6カ所で、福岡県は20カ所ありますね。全国に700近くありますから。児童相談所と一緒にですよ。相談所が今700近くありますからね。ところが、悲しいことに虐待が58,632件ですか、それが全部上がりますね。ところが、今里親の問題が出てんですね。結局、一時里親というのは各施設でやってるんですが。だけど、里親制度が

今NPO法人が設備入れるよりも、「里親制度で子供を育てませんか」という。だから、施設は今少しそういう意味で少なくなっているのもあります。現に児童ホームに行かれたら分かると思いますけど、80定員だったんですよ。今は49人ぐらいでしょう。「どういうことかね」ちゅうたんですけどね。あれは、1つは児童相談所も選択にあるんでしょうし。それだけ虐待の子供も多いはずなんですけども。小倉のフタバとか、門司ヶ関とか、もう満タンですよ。[] いますけどね。園長にいましたけどね。

やっぱり、じーっとしとっても駄目ですから。セイチョウ会議なり、それから[]に行っているいろいろ話を聞いて、「自分のところに必要であれば、やっぱり要請しないとね、やっぱり駄目じゃないですか」といってますけどね。でないと、国の予算というのは、税金はなんですか、大人の、今うちの家内は介護の方をやってますけど。で、いろいろわたしは、今知的障害の方に講義に行ってますけどね。知的障害の方は、18才以上で障害者の、そのケアやってますね。2対1の割合でそこ。ところが、児童はどうでしょう。6対1ですよ、国では。北九州は市長さんが5対1に精々しようとしてくれてますけどね。今職員の質も問われますよ。あんまり少ない、もう少し施設が協力し合って、子供が児童相談所の中に置いて、置かれるのじゃなくて、施設に入れるものなら入れてあげて欲しいと思いますよ。それと、養護の話になると船と関係ないかも知れませんが、幼児期に入ってくるお母さんがよく面会に来てましたね。下の子と上の子が違って、下の子はね、「お母さんに会いたい」ち、子供の意思を尊重して会わせます。上

の子はねえ、小学3年生、「わたしは会わない」ち。そいで、お母さんが帰って行くときにね、カーテンの隙間からお母さんが帰って行くのを泣きながら見ている、これ現実なんです。

だから、お母さんたちに「生徒の将来どっちね」、なかなかむずかしいですね。で、虐待というと今ネグレクトが非常に多い。要するに直接暴力でなくて、ものを与えない、食べさせない、病院に行かせない、学校に行かせない、これが非常に多いですね。親がやっているんですよ。だから、施設がまだまだもっと積極的に、あれですよ、やらなきゃいかんと思いますよ。最終的には親に返すことが目的ですけどね。

田 上： 実は先ほどの児童ホームのお話でも、学校とそのもっと近付いて、自分たちだけでこう閉ざすのではなくて、先生の、親御さんちゅう、大人の問題ですよ、結局は。子供は純真で、そんなん子供同士で、そりゃ、喧嘩とか人間はそれぞれ自分が主だというのがあから、自己欲とかありますけど、結局は大人の問題ですね。

佐々木： そうなんです。そういうことがあってから、子供たちが遊びに来るようになりましたからね。今のは昭和4年に建て替わったんですけど、その前は木造のですね、ちょっと表向き洒落た洋館風の建物でしたね。だから、とても自由にね、やってましたから。だから、子供さんたちは、わたくしは「本当に喜んでいただけたらなあ」と、その当時ですね。

田 上： そうやって、一緒に寝起きしてですね、ということ自体でも、その子供だからそんなお上手をいう訳ではないですけど、そういう形でどっかに入ってるもんなんですよ。

佐々木： 朝学校に行くときに、よく、しもやけとかが、女の子が、僕は今でも忘れませんけど。[]「先生痒い」ち、「持っといで」ちいって、こうやってさすってやるんですよ。「ありがとう」て、やっぱりうれしいんですよ。そういうやっぱりスキンシップを好んでましたからね。

田 上： どうしてもね、親御さんと離れているから。

佐々木： わずか1週間したら会えるんだけど、やっぱり小さい子供にとったらたまらない。

田 上： そうですね。中学生とかなると少しは理解、それでもやっぱり寂しいとかいう気持ちがあるでしょうね。

佐々木： やっぱり、僕が1回万引きの経験をしましたけど、中学生が街へ出て、警察から電話があって、連れに行ったことがあるんですよ。だから、そうしてから、結構、警察から[]、「これは叱られるぞ」と思ったんでしょうね。ところが、担当にね、「あんた黙っていいから、黙っていいから、黙ってなんもいわんで抱きしめてあげなさい」。手間をかけましたよ。

入寮生たちの出身地

田 上： 彼らはオカ（陸）に上がって、どういうところに家とか、アパートとか借りて住んでいくんですか。

佐々木： だから、純粋に若松にいる方は、あまりいないのかなあと、わたし思うんですけどね。

田 上： 出身は、先生、大体どの辺りですか。まったく若松の者ばかりじゃないでしょう？

佐々木： いや。若松の者だけでなく、熊本もありましたしね、大分もありましたし。

田 上： 四国とか。

佐々木： 中間とか、はい。四国の方もおられました。

たね。大瀬戸さんとか、お父さんが海で亡くなって、あの子は小学校6年生でしたか。あの人は広島に帰られましたね、お母さんと。それと、高倉健の親戚ちゅうのが、中間に帰りましたね。

田 上： えっ、高倉健のなんですか。

佐々木： 高倉健のね、親戚ちいいよりましたね。で、お父さんがその船のウィンチかなにか、鉄が頭に当たってね。吉野病院に入院して、結局、もう働けなくなって、船を下りましたけどね。子供が3人おりましたから、中学、小学あたりは大変だっただろうなあと思いましてね。やっぱり海の[]というのは切ないですね。いやー、それが、「岸壁で一杯呑みよって海に落ちた」ちて。それで、行ったことがありましたけどね。お父さんが友だちとですね、岸壁でなにか焼いて一杯呑んで、「さあ、船に帰ろう」というたら、落ちとるんですよ。船のあれ、あれが狭いんですよ、わたししゃあれ怖いで、もうなかなか、こうしなってね、僕渡るのにも相当手を焼かせましたけど。だから、ちょっとやっぱり酔っ払うと落ちますですよ。

田 上： 船から落ちたんですか、岸壁からですか。

和 代： ハシケ。

佐々木： はい。岸壁から酒呑んで、その足でハシケに帰るとき。

田 上： いろんな事故があったんでしょうね。先生の。

佐々木： ええ。

田 上： 緊急の連絡というのは、船にはできないんでしょう？

佐々木： ええ。所属の会社に連絡されて。

児童ホームの日課

田 上： 朝は何時に？ 7時に？ 一日の。

佐々木： 朝は6時半の起床です。そして、7時の

食事ですね。そして、お掃除をして、先に起床して、すぐ洗面を済まして、掃除。

田 上： 掃除が先。

佐々木： 食事。で、あとは学校に行くようにしてね。学校は近いんですけどね。で、用意して学校に行って、帰ってくるのが大体、1年生は午前中で帰って来てましたけど。高学年になると大体午後3時過ぎ、中学生になると大体5時、それで6時食事です。6時の、5時30分でしたよね。それがちょっと早いんじゃないやろかと検討したんです。そしたら、結局、調理の職員の後始末をして帰るのに8時になるんですね。だから、そこら辺がむずかしいんですね。なかなか5時半を6時にできなかったですね。そいで、おやつが3時で、まだ学校から帰ってない子は、夕方の7時過ぎにおやつを出して。で、大体小学校はもう9時の消灯ですね。中学生は10時まで。で、当時はテレビがやっとありましたかね。テレビ見るのもちょっと珍しいぐらいでしたけれども。そういう繰り返しでしたね。

わたしはもう中学生のところへ行って、中学生はやっぱりいろいろ話をしたいだろうから、一緒に中に入ってやったり寝たり。話は好きですからね、子供たちは。それは、いい勉強になりましたよ。

田 上： でも、そうやって一緒に泊まれたりとか、住み込みのような形でちゅうのは、先生以外の方はいらっしゃらなかったんですか。

佐々木： 職員は、私が門司へ帰るときは、男性職員、事務の方がおられましたからね、十分相談して、施設長がたまにいましたからね。

田 上： それは3年間ていうことで、そのあとは。

佐々木： そうですね。結婚してからは、もう

ちょっと住み込みはできませんから（笑う）。その3年間、そこで過ごさせてもらったことが、やっぱり後で自分のいい勉強になりましたね。

よくムガイがあったりして、[]ですよ、「今どんなふうにしてムガイするのかなあ」て、聞いてみたら、男子は上におりますから、2階に。あの樋がありますね、雨樋を伝って降りるんですね。

田 上： ムガイというのは、その無断外出のことですか。

佐々木： それで、今はですね、宿直のおじさんがおってセンサーが付いとるんですよ。だから、表から見てるとすぐ分かるんですよ。そしたら、裏の一山登って、女の子はよく行っていましたよ。中学生が1回ぐらいそんなことが。で、帰ってきて泣きながら僕の前でいいましたよ、「先生、自由が欲しかった」ちて（笑う）。

田 上： 自由ですか。

佐々木： 「自由でなんや」て、やっぱり外に出ると、なにかそういういろいろできると思ったんでしょう。現実はなかなか。

門司と八幡の児童ホーム

佐々木： 1つだけ分かったんですけど、ハシケ溜まりがですね、北九州の端っこなんですよ。1つは若松にあったんですけど。八幡製鉄の構内にありましたよね、ハシケ溜まりが。だから、あれで八幡の児童ホームができたんですね。

若 宮： もう1つは、門司のですね。今ちょうど門司港レトロのところにハシケ溜まりがあるんですよ。着けるところがですね。それで、その児童ホームがあったんですね。

佐々木： あったですね。

若 宮： それは戦後ですか。あの八幡と門司のあれは、戦前ですか。

佐々木： いや。戦後です。

若 宮： 戦前できたのは、若松だけですね。

佐々木： 若松が一番古いですね。昭和4年です
からね。

若 宮： 後の2つは戦後なんですね。

佐々木： そうです。

田 上： 現在はどうなっているんですか。

若 宮： 今ないですね。

田 上： 両方ないんですか。

若 宮： 1つは、[] として場所も変わっている。

佐々木： 門司ヶ関学園は、やっぱり一般児童の養
護施設として []。

若 宮： 八幡にハシケ溜まりがありましてね。八
幡製鉄の一番奥のですね。こっちから入っ
たら、川の奥のところにですね、確かあっ
たんです。あっこにあったんですよ。

田 上： それも当然戦後のなんでしょう。

佐々木： 戦後ですね。定員は30 だったんですよ。

田 上： 八幡の方は？ 両方ともですか、30 名
定員。

佐々木： 門司は70。その70 が今も変わってない
んです。結局、一般養護になってからも。

田 上： やはり、そこから近くの学校に通うんで
すか。

若 宮： そうですね。そこにやっぱりその本船と
いうのがばーっと来ましてね。そこにハシ
ケを着けて、仕事はいっぱいあったんです
よ、ハシケの仕事が。製鉄構内からも荷物が
動いていましたから。

田 上： 有り難うございました。貴重なお話を。

佐々木： 役に立つのか分かりませんが。

田 上： いや、いや。確固たる教育理念のもとで
教育されていたことがよく理解できました。